

1) 『弱法師』

謡曲。観世元雅（1400頃?-1432）作（曲舞は世阿弥作）。世阿弥自筆能本（1429年）の、1711年臨模本が現存する。作品の典拠は不明だが、説教『しんとく丸』と同工である。一時中絶していたのが、元禄（1688-1704）頃復曲。現行台本は後世の改変とされる。

高安通俊は人の讒言を信じて一子俊徳丸を館から追放したが、その後無実がわかって、行方の知れぬ俊徳丸のために天王寺で施行を行う。施行の場に、盲目となって乞食の群れの中で弱法師と呼ばれている俊徳丸を見つける。通俊は夜になってから人目を避けて俊徳丸を連れ帰る。この作品は主人公俊徳丸の、逆境を超越した澄み切った諦観を描くことに力点が置かれている。

2) 『しんとく丸』

説経浄瑠璃。現存する最古の本は、佐渡七太夫正本の正保5年刊本だが、成立は中世末にまでさかのぼる。この他に先にあげた、天和・貞享期頃の江戸うろこがたや孫兵衛版もある（こちらは以後略称として江戸版『しんとく丸』と記す）。

高安信吉長者は清水観音に申し子として、しんとく丸を授かる。しんとく丸13才の時に実母が死に、継母が迎えられる。継母は美しいしんとく丸に邪恋をしかけ、拒否された恨みで清水観音に、しんとく丸が「人のきらひし違例」（「癩」を意味する）になるよう呪詛。ためにしんとく丸は「三病」（「癩」を意味する）となって失明し、天王寺に捨てられる。清水観音のお告げに随って熊野の湯に行く途中、婚約者乙姫の館へ、それと知らずに施行を受けに立ち寄る。ここで館の女房達に笑われて恥ずかしく思い、天王寺に引き返し、餓死することを決意する。しかし、しんとく丸を追って館を出てきた乙姫と天王寺で巡り会い、ともに清水観音に詣で、観音から授かった鳥箒で目を撫でると、病が本復する。二人は結ばれて乙姫の館で幸せに暮らす。一方、信吉長者は盲目となって零落し、天王寺で継母とその子、乙の二郎と共に乞食をしていた。しんとく丸が天王寺で行った施行の場で父子は再会する。しんとく丸は父を連れ帰るとともに、継母と乙の二郎の首を切る。

3) 『弱法師』

浄瑠璃。近松門左衛門作、竹本義太夫正本。1694年、大坂にて初演。ほとんどの構成は1661年刊行の古浄瑠璃「しんとく丸」に拠っている。天王寺における善光寺出開帳にあわせて作られた作品であるため、善光寺の御利益が強調された展開となっている。

河内の長者左衛門尉通俊の死後、嫡男俊徳丸と次男次郎丸との跡目争いとなり、次郎丸の母の呪詛によって俊徳丸は「癩」になる。次郎丸一派によって、家臣藤太と共に館を追い出され、藤太の家に身を寄せる。だが薬代がかさむため、藤太一家の経済的負担を思い、また業をさらすために、自ら天王寺へ行く。非人乞食の中に混じって暮らす、「癩」による中途失明のため足元がおぼつかず、よろめきながら歩くので「弱法師」とあだ名された。婚約者露の前による天王寺での施行の場で露の前と巡り会い、彼女が持っていた善光寺の印文の御利益で、病が本復する。

第二 1907年「癩予防二関スル件」

4) 『莠伶人吾妻雛形』

浄瑠璃。並木宗輔・並木丈輔作。1733年に大坂にて初演。

法会の稚児舞の役を巡る争いのために、俊徳丸はライバルから毒酒を飲まされて「癩」になる。陰陽師から、「癩」は神仏に祈っても効果がなく、人目の多いところで諸人に顔をさらせば、その悲惨さに毒を盛った者までも、憐憫の情を起し、快気することもあると告げられる。家臣仲光夫婦は反対するが、父親の「これぞ誠の親の慈悲」との意向で、先祖の恥にならぬよう、家名を隠したうえで、天王寺に捨てられる。最後には、寅の年月日刻限に生まれた女性の生き血を飲めば「癩」は治るという「言い習わし」通り、初花という、寅年月日刻限生まれの娘の生き血を飲むことによって治癒する。

5) 『摂州合邦辻』

浄瑠璃。菅専助・若竹笛身弓作。1773年、大坂にて初演。

母に先立たれた俊徳丸は、美貌の継母・玉手御前から不義を持ちかけられるが、拒絶。それを逆恨みした玉手から、毒酒を飲まされて「癩」になる。以後もしつこく言い寄る玉手から逃れるためと、「癩」が家の恥となることを思って、後生を願い、自ら家を出て天王寺で乞食となる。天王寺で俊徳丸を追ってきた許嫁の浅香姫と再会し、ともに玉手の父・合邦の庵にかくまわれる。そこへ玉手が俊徳丸を追って訪ねてくるが、合邦の手によって刺される。虫の息の中で玉手は、実は次男の次郎丸が、跡目争いで俊徳丸の命をねらっていたので、俊徳丸を館から逃がすために、わざと恋を仕掛けたり「癩」にしたのだと告白。寅の年月日刻限に生まれた自分の生き血を飲ませ、俊徳丸の「癩」を治して死ぬ。

3. 各作品の分析

1) 謡曲『弱法師』

「癩」者の扶養

俊徳丸が父の館を追放されたのは、「癩」のせいではなく、讒言による。俊徳丸はその時点では、いまだ健康であり、天王寺へ行ってから悲しみのあまり失明したが（「思ひのあまりに盲目となりて候」）、「癩」だと明確には書かれていない。俊徳丸は不幸な境遇を、「あさましや、前世に誰をか厭ひけん」と、自分の前世の行いの報いだと考えている。父は天王寺の施行の場で、乞食に身を落とした息子を見つけたが、人前で親子の名乗りをあげるのを恥じ、夜、人目を避けて館へ連れ帰る（「人目もさすがに候へば、夜に入りてそれがしと名のり、高安へ連れて帰らばや」）。ここでは父親は、乞食をしているのが我が子であることを人に知られるのを恥じてはいるが、病身の子を家へ連れ帰って養育するのは当然と考えている。

2) 説経節『しんとく丸』

貴族の「穢れ」意識

京都の貴族出身の継母が、夫のぶよしに向かって、しんとく丸を追い出すよう強く迫ったために、

しんとく丸は天王寺に捨てられることになる。

「それ都辻すがら、人の沙汰なすは、それ弓取の御内に、病者のありければ、弓矢冥加七代尽くると沙汰をなすと。承ればしんとくは、人のきらひし違例の由承る。いたはしうは存ずれども、いづくへなりと、ひとまつ本へお捨てあれ」

継母は都での風聞と断った上で、病人を武士の家に置いておくと、武運が七代にわたって尽きるから、しんとく丸を追い出すように求める。ここでは「病者」とあって、「ひとのきらひし違例」＝「癩」だけが排除の対象にはなっているのではない。

ちなみに、天和・貞享期の江戸版『しんとく丸』もまた、「八條殿のひめ君」である継母が「身づからくぎやう（公卿）の家にてさむらへば、たつけむりをいとい、ち（地）を三尺けづり候、いづくへ也共すて給へ」と、都の貴族出身である身にとっては、家内の「穢れ」は耐え難いという根拠を以て、しんとく丸の追い出しを夫に迫る。

継母の要求に対して父親は、「長者の身にて、あれほどの病者が、五人十人あればとて、育みかねべきか。一つ内にいやならば、別に屋形を建てさせ、育み申さう、しんとくを」と、しんとく丸を捨てるかどうかは、病人の扶養という経済的負担の問題として応じている。さらに同一の建物がいやならば、別屋の形で養育しようと提言し、家から完全に追い出すことを拒否する。

最終的には、継母が離婚を盾にしんとく丸の追い出しを要求したために、父親はしんとく丸の乳人に命じて、天王寺に捨てさせる。

お寺参りに来たはずが、天王寺に捨てられたことに気づいたしんとく丸は、「違例を受けたに、親の身として育みかね、お捨てあり、そでごひを申すこそ、父御の御面目にてあるべき」と、「癩」という重病に冒された息子を、親の身で養育しかねて捨て、そのために自分が乞食をしたとて、それは自分ではなく父親の恥なのだと考える。

しんとく丸を追って訪ねてきた婚約者・乙姫に対しても、「親の慈悲なるに、我が親の邪見やな。天王寺にお捨てあつてござるが」と、自分を捨てた父親の無慈悲を非難してみせる。

これらのやりとりから、中世末から近世初期にかけては、「癩」に対する「穢れ」意識は京の都に住む貴族階級を中心とする認識であり、それが都の高位の武士にまで広がっていた状況が伺われる。

しかし河内の長者という、富裕ではあっても地方の地下人である父親や、その周辺の人々にとって、病人を捨てるか否かは、「穢れ」ではなく経済的な問題として描かれている。説経を聞く庶民にとってもまた、長者という経済力のある身で、病気の我が子を捨てるのは、いかにも無慈悲な行為と認識されたであろう。

婚約者の乙姫が、しんとく丸を訪ねて旅に出ることを、乙姫の親兄弟が許可していることも、「癩」への「穢れ」意識に基づく差別を感じさせない。

外見への忌避感覚

ただしこれらのことは、中世末から近世初期に、「癩」への忌避がなかったことを示すものではない。乙姫は自分の家を出るときに、「承ればしんとく殿、人のきらひし三病者とおなりあり、諸国修行と承る」と述べており、「三病」＝「癩」は人が忌み嫌う病気であるという認識は定着している。

第二 1907年「癩予防二関スル件」

さらに館にあって療養中だった時も、しんとく丸は「違例を受けたるは見舞ひも受けぬ」と、誰も病床に見舞いに来てくれないことを、家臣仲光に向かって嘆く。

忌避の根拠は「穢れ」ではなく、外見の変貌にある。たとえば父の館を出て天王寺へ赴くしんとく丸の姿を見て父親は、「見目よき稚児と沙汰なしたるに、違例を受けたは、馬乗り姿も見ぐるしや」といって泣く。

江戸版『しんとく丸』でも父親は、「かくいれい（違例）うけぬれば、我子ながらも見ぐるしや、ましてやたにん（他人）のきらふ事、げにどうり（道理）やことわり（理）」と涙する。父は、人々が息子を忌避するのは、その容姿の「見ぐるし」さに由縁するのだと納得している。

乙姫は、天王寺で盲目のしんとく丸から、乙姫本人であることを疑われた際、「乙姫にてない者が、御身がやうなるいみじき人いだきつかうぞ」と答えている。「いみじき」とは「ひどい」「恐ろしい」という意味の言葉であり、その「いみじき」姿故に、他人ならば「いだきつ」くことはありえない、という認識がうかがえる。

乙姫が天王寺で、しんとく丸を肩にかけて歩く姿を、「町屋の人は御覧じて、これを哀れとみな感ぜぬ者はなし」という描写も、天王寺界隈の町人達の、「癩」の「穢れ」に対する恐怖は読みとれない。

「三千人に見すれば」（江戸版）

「癩」患者を家から捨てたのは、庶民にとっては経済的な理由が大きいことを指摘したが、江戸版『しんとく丸』では、父親がしんとく丸を天王寺に捨てるにあたって、次のように述べる。

「かやうのいれいじや、三千人に見すれば一たんへいゆ（平癒）すと聞からに、すてばや」

自身の罪障の結果としての病気や身体障害を、大勢の人に見せると罪が贖われるという、いわゆる「業をさらす」という発想の登場である。

中世末に成立し、近世初期まで語られていた正保版説経節『しんとく丸』には、いまだこういう発想はない。しんとく丸の夢枕に立った清水の観音は、「御身が違例、しんから起こりし違例でなし。人の呪ひのことなれば、町屋へそでごひし、命を継げ」と告げる。天王寺での乞食は、業をさらす所業ではなく、身命をつなぐための手段に過ぎない。だが江戸版では、この観音の夢告も削除されている。

業をさらすことによって贖罪するという考え方は、「癩」のような難病以外に、身体障害についても当てはめられた。江戸時代の見世物小屋では、身体障害者の見世物がひんばんにかけられた。見世物小屋の客引きの口上で、障害のある体を見世物として人目にさらすことが、業をさらすという贖罪行為となり、これを見物することは障害者の贖罪に協力する意味で功德となると言われるようになるのは、江戸版『しんとく丸』と同じ、やはり17世紀後半からである。

このように見ていくと、江戸版『しんとく丸』に初めて登場し、浄瑠璃『弱法師』、『莠伶人吾妻雛形』、『摂州合邦辻』へも引き継がれる「業をさらす」という考え方は、ひとつには芝居や見世物小屋という庶民の娯楽の場を通じて、社会に拡散していったと考えられる。そして「業をさらす」という考え方は、病人を扶養できるか否かという経済的理由に関係なく、「癩」患者を家から追放す

ることに結びついた。

3) 浄瑠璃『弱法師』

「諸人におもてをさらす」

1694年の浄瑠璃『弱法師』では、俊徳丸は家臣仲光の家を、経済的負担をかけることへの遠慮と、天王寺で業をさらすために出奔する。

「其上かやうのみれいしや（「癩」病人）の、諸人におもてをさらしぬれば、必ほんぷくするとき、命おしきにあらね共、何とぞ二たび世に出て、かれらがおんをもほうぜん」という俊徳丸の台詞では、「諸人におもてをさらす」、つまり業をさらすことが、天王寺での乞食行為の本質となっている。

仏教の本来の考え方に基つけば、乞食をするのは自分にとっては、解脱への修行行為であり、施与する人のためには、「福田」となる。「癩者」が人目の多いところで、物乞いをしながら自分の病気を人目にさらし、病気の治癒を願うのは、仏教本来の乞食行の主旨とは異なる、日本的な発想である。

業をさらせば病が治癒するという考え方は、同じ近松作の1693年上演、浄瑠璃『せみ丸』にも描かれる。中世では蟬丸は、業をさらすために逢坂山に捨てられたのではない。中世の謡曲『蟬丸』（世阿弥作か）を見てみよう。

次の台詞は、父延喜帝によって逢坂山に捨てられた蟬丸のものである。

「もとより盲目の身と生まるる事、前世の戒行拙きゆゑなり。されば父帝も山野に捨てさせ給ふ事、御情けなきには似たれども、この世にて過去の業障を果し、後の世を助けんとの御はかりこと、これこそ真の親の慈悲よ」

彼の身体障害の原因が、前世での行いに対する報いと考えられていたこと、だからこそ父帝は、逢坂山で乞食をして罪障を果たし、後世での幸せを願えという意図で、蟬丸を捨てたのだと理解される。逢坂山で乞食をする目的は、業をさらして現世での眼疾の治癒を願うことではない。

このあと蟬丸は、同じように障害のために宮中を追われた姉・逆髪と巡り会って再会を喜び合うが、再び別れて一人で暮らし、盲目が治ることはない。

これに対して前掲の近松の『蟬丸』では、蟬丸は美男故に多くの女性の恨みをかって盲目となる。父帝は「此世にて諸人にはぢ（恥）をさんげ（懺悔）して、ごうしゃう（業障）をはたし、ごせ（後世）を助るいとなみ、相坂やま（逢坂山）に捨置べし」と、明らかに業をさらす意図の下、蟬丸を逢坂山に捨てさせる。中世の謡曲『蟬丸』と、元禄期の浄瑠璃『せみ丸』では、蟬丸の逢坂山での乞食行為の目的は、仏道修行から業をさらすことへと変化している。しかも近松の蟬丸は、逢坂山で目が見えるようになる。

江戸時代、蟬丸説話は業をさらして目が治る話として、広く知られるようになったらしく、後の『莠伶人吾妻雛形』や『摂州合邦辻』でも、俊徳丸が天王寺で乞食をするにあたって引き合いに出されることになる。

第二 1907年「癩予防二関スル件」

熊野の靈泉から医術へ

説経節『しんとく丸』では、しんとく丸は観音のお告げに従って、中世から「癩」治療の場として名を馳せた、熊野の靈泉に向かう。ところが浄瑠璃『弱法師』では、観音のお告げも靈泉の話も一切登場しなくなる。そのかわりに俊徳丸は父の館を出た後、家臣の家族の献身によって、貧しい生活の中で高価な薬を服用している。だからこそ「いじゆつ（医術）をろかはなけれ共、さらにくはいき（快気）もえ給うはず」という嘆きも生まれる。

ただし、浄瑠璃『弱法師』は、天王寺における善光寺の出開帳に合わせて書かれた作品であったため、最終的には俊徳丸の「癩」は、善光寺の印文で治るといふ御利益譚になっている。

4) 『莠伶人吾妻雛形』

業病観の展開と業をさらす意識

1733年の『莠伶人吾妻雛形』から、「業病」という言葉が登場する。

一連の作品の中で使われている、しんとく丸の病気の呼称を列記すると、以下のようになる。

作品名	病気の名称
謡曲『弱法師』	「盲目」
正保版『しんとく丸』	「人のきらひし違例」「人のきらひし三病者」「人のきらひし病者」
江戸版『しんとく丸』	「三千人のきらしいれい」「あしきいれい」「人のきらしいれい」 「やまふ」
浄瑠璃『弱法師』	「あしきらいさう」「人のきたなむるれい」
『莠伶人吾妻雛形』	「異病」「癩病」「天刑の病」「業病」
『摂州合邦辻』	「三病」「悪病」「癩病」「癩疾」「業病」「癩病人」

説経節『しんとく丸』までは、「癩」は「いれい」「やまふ」という、一般的な病気を意味する言葉に、「人のきらひし」などの言葉をつけて、「癩」であることを限定して示す。17世紀末の『弱法師』にいたって初めて、「らいさう」（癩瘡）という病名が登場する。

18世紀の『莠伶人吾妻雛形』と『摂州合邦辻』で、「業病」「天刑」という、業罰観を明確に示す呼称が使われるようになるのは、庶民の「癩」への差別意識が、外見に対する「きらひ」「きたなむ」という、従来の感情的なレベルだけでなく、「癩」者が犯したであろう、前世や現世での罪障に対する非難をも、強く伴うようになったことの反映と考えられる。

『莠伶人吾妻雛形』は、俊徳丸の病の罪深さを、陰陽師が次のように表現する。

「癩病をやむ人ハ、仏千神千体人間千人、合せて三千の仏神人にくまれたる業人と申せば、神仏を祈しとて其しるし有べからず、つくづくと存るに、此御病気をなをさんにハ、いたハしながら若君を人だち多き所にすておき、諸人に御顔見せ申さば、恨をふくミ毒をあたへし者迄

も、あはれや不便^{びん}と角もおれ、自然と御快氣有べし」

江戸版『しんとく丸』で初めて登場した「三千人のきらいしいれい」という言葉は、『莠伶人吾妻雛形』で「三千の仏神人にくまれたる業人」と、「業」の深さを一層強調する表現となった。

館で俊徳丸を診療した医者、俊徳丸には「癩」であることを隠し、「発班」という病氣と偽る。「癩」が本人に告知しにくい病であったのは、容貌が変化して嫌悪されるためだけでなく、「業病」「天刑病」という偏見の強まりと、それ故に不治の病とみなされたことの結果だろう。先に見たように、実際の医療の現場でも「癩」の告知は躊躇されていた。

この作品では、陰陽師が「癩」は仏神に祈っても効果ないが、人通りの多い所で「諸人に御顔見せ」れば、人々の憐れみを受けて治ることもあると提言する。これを受けて俊徳丸の父は、蟬丸が逢坂山に捨てられて両眼が開いたという故事を持ち出した後、「貴賤ぐんじゆの中にすて、憐をかけさせなば、人の恨そねミもはれ、本復せまじき物でもなし、是ぞ誠の親のじひ、しかし長者の子といはゞ、先祖の名字をけがす道理にて、世間へな（名）をつゝミ、仏法最初のとちなれば、津の国天王寺にすて置て、ほとけにえんをむすばせよ」と、天王寺へ捨てる決断をする。

上記の父親の台詞で注目されるのは、子供を「貴賤ぐんじゆ（群衆）の中」に捨てるのは、長者の家としては「先祖の名字をけがす道理」、つまり「家」の恥になると考えていることである。説経節『しんとく丸』では、富裕な家の子が乞食をするのは親の恥であると考えたが、ここでは親だけではなく「先祖」にまで遡って「家」全体の恥と認識されている。

「血」の病としての「癩」

「癩」を寅の年月日刻限生まれの人の生き血で治す、というモチーフは、この作品から登場し、『摂州合邦辻』に継承される。館で療養中の俊徳丸を診た二人の医師は、「癩病ハ天刑の病と申せば、用べき薬もなし。しかし昔より、世俗にもいひならハせし妙薬にハ、寅の年、寅の月、寅の日、寅の刻に出生したる女の天突^{てんとつ}の生血を取て癩病人にあたふれハ、立所に妙有事、掌をかへすがごとし。此薬のなき内ハ、本復これなし」と、「癩」は「天刑」病だから薬はないが、世俗の言い習わしに、寅の年月日刻生まれの女の生き血を飲ませれば治る、と告げる。そして天王寺で、そのような女性の生き血を手に入れた家臣仲光は、「癩病血より生じ、又血を以てなをす道理」と、俊徳丸に飲ませたところ、たちどころに治癒する。

仲光のこの言葉に見られる病氣観は、時代は下がるが医師・森立之（1807-1855）著『遊相医話』（1848年自序）の中の、梅毒について論じた「血液の物を以て血液を救ふの理」という考え方に通ずる。森は「馬血」を飲んで梅毒が治癒した事例をあげている。

生き血のモチーフは一見荒唐無稽であり、俊徳丸を診た医師達も、生き血で治る話は「世俗」の言い習わしであると、一応ことわってはいる。だが「癩」を血の病とみなし、生き血で治そうとする発想は、現実の医療の場で「癩」の瀉血治療により「悪血」を出して治す発想とも通ずるものがある。

また、物語の中に医師が登場するのは、しんとく丸の各作品の中では『莠伶人吾妻雛形』が最初

第二 1907年「癩予防二関スル件」

である。さらに説経節の中のしんとく丸が、僧侶の法話を聞くという口実で天王寺へ連れ出されたのに対し、『莠伶人吾妻雛形』では、名医にかかるためという口実で天王寺へ向かうのも、18世紀の観客の日常生活に医療・医学が深く浸透し、影響力を持つようになってきていたことを伺わせる。

5) 『摂州合邦辻』

「業」と家の「恥」

『摂州合邦辻』では家出をする際に俊徳丸自らが、次のように独白する。

「思ひも寄らず悪病に、苦む我が身は前世の業。唯悲しきは高安の、家名を汚す残念さ。嘸父上の御無念と、思ひ廻せば身も世もあられず。生害せんと思へども、老ひたる父に先立つ事、不孝の中の随一と、聞けば死なれぬ我が命。とあつて館にあるならば、自然と世上の人も知り、父上ばかりか先祖の恥」

俊徳丸は「癩」におかされたことを、「前世の業」の結果だと考えているとともに、そのような「業」の深い病にかかることを、「家名を汚す」と認識している。「日本六十余州を廻り、神社仏閣に歩みを運び、前世の悪業滅しなば、それぞ誠の罪障ざんげ、思ひ切つたり迷はじ」と家出を決意する。その際の置き手紙には、「計らざる身の業病。人中の交りも叶ひ難く、家の恥、父の御恥辱と存じ候へば、身の御暇を賜はり、仏神に一身を抛ち候はば、せめて悪業も滅し、快気の時節も候はんと、御名残惜しき父上を振捨て、唯今国遠仕り候」と記している。「癩」は「業病」であるという認識が、仏神に帰依し、「業」をさらすことによって病が快気するという思いを強くしている。

明け方に人目を忍んで俊徳丸を見舞った父親は、次のように述べる。

「ヤレ俊徳よ必ず嘆くな、癩病とても百病の数には洩れず、聖人孔子の門人にも癩疾の賢人あり。いかなる高位高官も通れぬ病は恥ならず。人は何ともいはばいへ、我が子の病をうるさしとも、穢らはしとも思ふ親が三千世界にあるべきか。もしや若気に恥辱と思ひ、短気な心も出ようかと案じて老の口も合はず。」

父は俊徳丸が「癩」を恥じて、「短気な心も出ようか」と心配するが、その一方で息子の見舞いだというのに、わざわざ明け方に人目を避けて訪れている。それは父もまた、この病を「恥辱」だと思ふからだろう。

見舞いの直後に俊徳丸が家を出たことを知った父親は、蟬丸説話を引き合いに出して、息子の行為を肯定する。

「俊徳が業病も、過去遠々の報いと思へば、假令家出に及ばずとも、往来しげき街に捨て、前世の罪を償はんと予てより我が存念。某が詞も待たず国遠せしは遺にも通俊が子にてありけるぞや、天晴健気の俊徳丸。さしも孝ある身の上に類少き難病は、何の因果ぞ恨めしや、其儘に打捨て置く父難面しと恨むるな、例は恐れある事ながら、延喜帝第四の皇子、蟬丸の宮も難病故、逢坂山に捨てしぞよ。唯何事も定り事薄き親子の縁ぞと諦め、悔むな俊徳、我も歎かじ

歎かぬと、潔くは宣へど、親子一世の憂き別れと、目にもる涙、はらはらはらはら」

家を出て天王寺で暮らす俊徳丸は、「業病」に侵された障害者として人々から嘲笑や憐れみ、嫌悪の対象とされながら生活する。

「子供が大勢手を叩いて、弱法師弱法師と囃すを見れば、目も見えぬ癩病人。辺りの人の咄には、元はよしある人の子なれど、どうでも過去で悪い事、した報ぢやといふ評判。俄盲でよぼよぼよろよろ弱法師、もう見ずおかつしやれ、いちらしい者、穢い物と、口々しやべりそこそこに、教へてこそは行過ぐる」

このような生活も俊徳丸には、「前世の戒業拙くて、かかる難病盲目の、身と成果てしは過去の業因」と認識されていた。俊徳丸を追ってきた婚約者浅香姫が、変貌した姿にそれとわからず、俊徳丸自身に俊徳丸の行方を尋ねた時も、俊徳丸は死んだのだと嘘をついた。それは「かかる病も前世の業、仏の道に入らずんば罪の滅する事あらじと、煩惱の迷ひ晴らさん為、難面くはもてなせし」との思いからだった。

このように『摂州合邦辻』は、様々な場面で繰り返し「癩」が前世の悪行によってかかる「業病」であることを強調するとともに、それ故に家を出て「業」をさらす必要があることを説く。

血のモチーフと「血脈」

継母玉手御前の依頼で、俊徳丸に飲ませる毒薬を調合した医師は、俊徳丸の「癩」は「胎内より受けたる癩病ならず、毒にて発する病なれば」、寅年月日刻限生まれの女の生き血で治ると述べる。「胎内より受けたる癩病」と、「毒にて発する病」の二種類があるという説明は、先に医学書で確認した江戸時代の「癩」医学の考え方と一致する。「胎内より受けたる癩病」は「血脈」による「癩」で、後者の「毒にて発する病」は、ここでは毒薬を指すが、「食毒」にあたる。

医師の説明には、先に見た俊徳丸やその周囲の人々の考える「前世の業」という病気観の入る余地がない。17世紀末の浄瑠璃『弱法師』から明確になる医療の普及は、ここに至って医者 of 病気観を演劇空間に持ち込むまでになる。

寅の年月日刻限生まれの女の生き血が「癩」の妙薬であるという風聞は、この時代にはかなり定着していたらしい。玉手の母親は、寅年月日刻限の揃った子供であることを他言しないという「世の教え」に従って、娘の生まれた日時を世間に秘密にしてきたと述べている。

随筆『天言筆記』は「甲州巨摩郡下田村の百姓、友八三男米蔵儀は、寅の年月日時の生まれにて、癩病の薬に二月十日に殺され、生胆を取られしもかわいそうな事、芝居にも聞かぬいたわしき正説」という「ちらしがき」（1804年）を載せている。実際にこのような話が芝居などを通じて世間に流布していたのだろう。

第二 1907年「癩予防二関スル件」

容貌の変化

浄瑠璃『弱法師』では、俊徳丸は自分の風貌を「人にもあらぬ我すがた、すくせ（宿世）いか成むくひぞや」と嘆き、「人のきたなむ違例をうけ」と、「癩」は人が汚がる病と捉えている。天王寺では、よろよろと歩く姿から「弱法師」とあだ名され、笑われる存在であった。そして婚約者露の前に再会したときも、彼女から「露のまへにてなきものが、此いれいしやにいだき付き、それとなのりてあふべきか」と、説経節『しんとく丸』の乙姫と同様のせりふを投げかけられる。

こういった「癩」による容姿の変化は、『撰州合邦辻』に至るまで各作品の中で描写されているのだが、俊徳丸が美少年であったために、それはいっそう際だつ。『撰州合邦辻』では、「あれ程美しい若殿様に、取付く病も多からうに、ひよんな事や」と使用人達が噂し、俊徳丸の姿は「癩病に色黒み、蛾蚕の眉も凧の、木の葉と散りて枯々の、御有様ぞいたはしき」と描写される。

美しい婚約者浅香姫の容姿とも比較される。天王寺付近の人々は、「美しい娘と癩病人と、テモ木に竹といはうか、鉄棒に心天を継合した尋者」と語る。

前述のように、俊徳丸を天王寺まで尋ねてきた浅香姫にも、俊徳丸の変わり果てた姿にそれとわからない。「恋しき人はそこにとも、知らぬはかはるおもかげの、顔もけやけき悪瘡の、臭気いかがと袖覆ひ」と、潰瘍の臭気を気にしながら、俊徳丸本人に向かって俊徳丸の行方を問う。俊徳丸は「現在の妻にさへ見違へられしはいかばかり、見る目いぶせくなりつらん、浅ましきよとどうと伏し」と、盲目のために自分の姿の変化を確認できないながらも、嘆く。

目の前の「癩病人」が俊徳丸だと知った浅香姫は、「痛はしや、玉を欺くあてやかな、お顔も手足も此様に、変れば変るものかいの」とまた嘆く。

俊徳丸を追って館を出た玉手御前に再会した俊徳丸は、今の姿を見せれば玉手の恋心も失せようと、玉手に向かって「今は見る目もいぶせき癩病、両眼盲して浅ましき姿は、お目にかからぬか」と述べる。

「癩」の描写は、説経節の段階から一貫してその容姿の変貌ぶりを強調する。それは人々の「癩」に対する忌避の背景に、外見に対する強い嫌悪があったからである。が、同時に、一連の作品が物語の演出として「癩」の症状を意図的に強調して表現し、そのイメージを流布させ、人々の「癩」への恐怖と嫌悪感を煽る役割を果たした側面も、考える必要がある。

演出された「癩」のイメージ

近世初期の説経浄瑠璃の時代から、しんとく丸をめぐる物語は、京・大坂・江戸の三都を中心に各地で繰り返し演じられてきた。観客に対してステレオタイプ化された症状を舞台上で視覚化して見せるだけではなく、「癩」が都の貴族の間では「穢れ」意識を持たれていたこと、「業病」・「天刑病」という言葉とそれにまつわる偏見、先祖の名を汚す不名誉な病であるという意識、業をさらせば治る可能性があること、医学的には親から受け継ぐ「癩」と「毒」による「癩」の2種類があると考えられていること、特定の日時に生まれた女性の生き血で治癒すること、そしてそのような残忍な薬でなければ治癒し得ない恐ろしい病気であるという認識などなどを、庶民芸能が人々の「癩」病観をくみ取りつつも、そこに巧みな演出を加えて、広く発信してきた事実は確認すべきである。

ことに『撰州合邦辻』『合邦住家の段』の最後の場面では、父に刺された瀕死の玉手御前が、両親を初めとする近しい人々が繰る百万遍の大数珠の中央に、「癩」におかされた俊徳丸とともに坐す。そして人々が念仏を唱える中、自ら懐剣でみぞおちを刺し、生き血を鮑の杯に受けて俊徳丸に飲ませる。冒頭で述べたように俊徳丸の人形は、ここで素早く「癩」の面を取り去って、元の美少年に戻るのである。このシーンの凝った演出は、「癩」に対する人々の「血」や「業」のイメージを巧みに利用しながら、それを猟奇的で大仰な演出によって強調して見せ、「癩」に対する特殊視を助長する。

4. 小括

しんとく丸説話をめぐる中世から江戸後期の作品を比較する中で、明らかになった点を確認しておく。

まず中世から江戸時代初期に成立した、謡曲『弱法師』や説経節『しんとく丸』では、「穢れ」意識に基づく「癩」の排除は都の貴族のものであって、庶民レベルでは見られない。庶民が「癩」患者を家から出すとしたら、労働力たりえない病者を扶養できるかどうかという経済的な問題が大きかった。

庶民の差別意識は「穢れ」よりも、むしろ「癩」患者の外見に対する嫌悪感として表現される。そして感覚的な問題である嫌悪感は、社会や家からの「癩」患者の排除を、絶対的なものとはしていない。

「癩」をことさらに「業」の深い病として描くようになるのは、17世紀後半の江戸版『しんとく丸』からである。この作品以降、「業をさらす」という考え方が登場し、さらに18世紀の『莠伶人吾妻雛形』からは「業病」・「天刑病」という言葉とともに、「癩」患者の「業」が一層強調されていく。そして「癩」は罪を犯した個人だけではなく、「家」の恥、先祖の恥となって、俊徳丸は家を出ざるを得なくなる。その背景には「癩」を家筋の病とみる考え方が影響していたと考えられる。

また『莠伶人吾妻雛形』以降はストーリーから神仏の救済のモチーフが消え、かわりに生血によって治癒するようになる。病を生血で治癒させるモチーフは、近世初期から「阿弥陀の胸割」として存在するが、生身の人間を殺してその生血で治癒させるのは、近世後期の演劇のグロテスクな嗜好に基づくとともに、「癩」は「血」の病であるという当時の認識の反映でもあろう。

『莠伶人吾妻雛形』も『撰州合邦辻』も、都市の劇場空間で演じられた浄瑠璃だが、先に見たように現実の都市社会では、これらの作品が上演された頃には「癩」は珍しい病となりつつあった。つまり観客は、生身の「癩」患者と身近に接する機会もないままに、「業病」「天刑病」という言葉や、「悪血」の「血脈」というイメージを増幅させていったのである。その姿は、強制隔離によってハンセン病患者に接する機会があまりなくなったにもかかわらず、遺伝と伝染の両面からハンセン病患者への恐怖と嫌悪の念を強めていった、近代日本人のあり方と重なるものがある。